

河島一仁 著

『職人集団の歴史地理—出稼ぎ鍛冶の地域的展開—』

古今書院 2021年3月 583頁 12,000円＋税

「鐵は金の王なる哉」との言があるように、鉄は人類によってもっとも広範に利用されてきた金属である。鉄製農具の重要性も自明のことであり、鋏の製造と修理を行う野鍛冶は、かつての農業社会において不可欠な存在であった。

野鍛冶に対しては、日本民俗学や日本史学、農学などが一定の関心を払ってきた。しかし、その研究の蓄積は多くはないうえに、民俗学では技術的側面が重視されやすい。農業以外の経済活動の重要性が意識され、日本史学を中心に手工技術を保持する職人の研究が活発化したのは、1980年代以降のことである。そのなかにあつて、出稼ぎのように非定住的な生活を送る人びとへの関心も高まってきた。

著者の河島氏は、1977年、丹波地方において紀州に出自をもつ野鍛冶と邂逅した。二毛作を行っていたかつての農民は、春秋の彼岸を目安として、摩滅した鋏を修理に出した<sup>1)</sup>。鋏を修理する時期が限定されていたために、出稼ぎという営業形態の野鍛冶が生まれたのであろうか。ともあれ、著者は、近畿地方の各地に残存していた紀州鍛冶をふくむ野鍛冶を精力的に訪ね歩いた。そして、東海地方の野鍛冶にも調査の対象を広げ、史料の蒐集と分析に邁進し、考察を積み重ねた。

犁を用いた牛馬耕や耕耘機、工場で大量生産された使い捨て鋏の普及などともなつて、野鍛冶は減少する傾向をたどりつづけてきた<sup>2)</sup>。そのため、野鍛冶に対する調査は1970年代の初頭にはすでに難しくなっていたとされる<sup>3)</sup>。紀州鍛冶は、世の中から忘却される直前で、著者によって克明に記録され、その実態の多くが解明されたのである。本書のおもな研究対象は紀州鍛冶であり、愛知県常滑市大野とその周辺を輩出地域とする大野鍛冶についても検討されている。

本書は、4部構成をとり、新稿の序章および終章と、21の既発表論文を加除修正した18章からなっている。巻頭には「紀州鍛冶」と記された1823(文政6)年の史料と、滋賀県長浜市鍛冶屋に現存する鍛冶小屋と鍛冶場、野鍛冶の道具類の写真が掲載されている。これらの写真と解説文に

よつて、紀州鍛冶の実在と、野鍛冶の作業風景がうかがえる。つづく序章では、際立った景観をなさない職人は歴史地理学の研究対象にされてこなかった反面、人口移動をともなう杜氏や漁民などは研究テーマになってきたことが確認される。そのうえで、本書の目的が「これまでの出稼ぎ研究ではほとんど看過されてきた野鍛冶の集団に関する歴史地理的な解明」にあると述べられる。

第1部の「研究史」は、つぎの3章からなる。

第1章 辞典の記述を通してみた日本における鍛冶に関する研究の蓄積

第2章 日本における鋳物師と鍛冶に関する研究の進展

第3章 アイルランドにおける鍛冶と鋤の研究史

第1章では、地理学や日本民俗学、日本史学の辞典の鍛冶に関する記述が整理・検討された。鍛冶に関わる研究の蓄積をほとんど有しない歴史地理学は、辞典の刊行に際して、隣接分野の成果をとりいれざるを得ない状況にあるとされた。

第2章では、鉄製品の加工者には、鍛冶のみならず、金屋や鋳物師などよばれる職人がいて、「居職」と「出職」に分けられることが確認される。そのうえで、鍛冶の定住と移動や、出稼ぎ鍛冶、鍛冶仲間などの諸課題を中心としつつ、地理学に関連する諸学問の研究動向が批判的に検討される。そして、18世紀以降の鍛冶は、(1)「城下町およびその他の集落で集住する野鍛冶」、(2)「村落に居住する野鍛冶」、(3)「廻村の野鍛冶」、(4)「出稼ぎ鍛冶」、(5)「刃物産地の鍛冶」、に類型化された。そのうえで、既存の研究では(4)が未解明であり、紀州鍛冶の集団としての実態が不明なため、日本における野鍛冶の全体像が把握できないとされた。

第3章では、本研究の結果を世界のなかに位置づけるべく、アイルランドのフォークライフが選定され、その研究史が整理された。フォークライフ研究は地理学と親和性の高い分野とされ、鍛冶に関する多くの知見を得てきたことが示された。

第2部の「東海地方における大野鍛冶の地域的展開」は、つぎの4章からなる。

第4章 三河と尾張における鍛冶集団

- 第5章 大野鍛冶と「江州辻村」の鋳物師と鍛冶
- 第6章 19世紀以降の大野村とその周辺地域における鍛冶
- 第7章 東春日井郡における大野鍛冶の地域的展開

第4章では、17世紀末に三河で書かれた農書の『百姓伝記』や地方史料を分析し、あわせて出稼ぎをふくむ大野鍛冶の研究史が整理された。そして、吉田（現・豊橋市）鍛冶が、岡崎（現・岡崎市）鍛冶や、徳川家康に関わる由緒をもつ大野鍛冶との間で、鋸の修理をめぐる競争していたことを論じた。

第5章では、近世中期に全国最大の鋳物師によるネットワークを構築していた辻村（現・滋賀県栗東市）と、大野鍛冶との関連について考察された。その結果、大野鍛冶の展開する明治中期の西三河において、辻鋳物師が有力な商工業者であったことを見出した。しかし、辻鋳物師と大野鍛冶の具体的な接点は判明しなかった。

第6章では、大野鍛冶の輩出地域が検討された。19世紀初頭の尾張国知多郡には135人の鍛冶がみられ、そのうちの約7割が知多半島西岸の大野村とその近郷にいた。しかし、既存の文献や現存する2軒の金物問屋および住民への聞き取り調査にもとづいて、1930年ごろの大野では鍛冶がほとんどいなくなった。そして、その近郷において出稼ぎ鍛冶と刃物鍛冶が並存しつつ、わずかに残存していた実態を明らかにした。

第7章では、知多郡から輩出された出稼ぎ鍛冶が多く受容された尾張の東春日井郡における鍛冶の分布と営業実態の変化が検討された。20世紀中頃の野鍛冶は、農具の製造と修理に加え、自動車などの修繕や火見櫓の建設などに従事するようになっていた。そして、高度経済成長期における「村の野鍛冶」の「鉄工所」への変化が示唆された。

第3部の「近畿地方における紀州鍛冶の地域的展開」はつぎの5章からなり、紀州鍛冶の受容地域である京都府と奈良県の実態が究明された。

- 第8章 『農具便利論』の「農具鍛冶」と「其処の鍛冶」

- 第9章 京都府における野鍛冶の地域的構成

- 第10章 船井郡における紀州鍛冶
- 第11章 京都府の山城における紀州鍛冶
- 第12章 奈良県における紀州鍛冶

第8章では、まず、大蔵永常の農書である『農具便利論』（1822年刊）が、摂河泉とその周辺諸国に農具を供給する堺（現・大阪府堺市）の鍛冶と、その農具を手本とすべき「其処の鍛冶」がいたと述べていることを注視した。本書は、この鍛冶に関する『農具便利論』の解釈を念頭に置きつつ叙述されていくことになる。そして、1823年の丹波国の地方史料によって把握された紀州鍛冶が後者にふくまれるとした。さらに、19世紀前半には紀伊の国学者が春に丹波へ出稼ぎをする数百人の鍛冶の実在について、1928年には地理学者の藤田元春が晩年に紀州に帰村する鍛冶についてそれぞれ言及していることを紹介した。

第9章では、1940年代の京都府で営業していた約300人の野鍛冶を府農具工業組合の名簿から把握した。そして、その子孫を対象とした1998年のアンケート調査から約70のサンプルを得て、28人の紀州鍛冶の存在をつきとめた。その分析にもとづいて、季節の出稼ぎを行っていた紀州鍛冶が他国での長期営業を経て晩年に現・和歌山県日高郡みなべ町付近に帰村するようになり、その後営業地に定住していったという見通しを示した。

第10章では、20世紀中頃の史資料の分析と、1977年に実施した聞き取り調査などにもとづいて、丹波に属した船井郡の野鍛冶（総数25軒、うち紀州鍛冶16軒）のライフヒストリーと営業の実態などが考察された。その結果、紀州鍛冶が20世紀後半までに営業地に定住していたことや、出稼ぎ鍛冶が受容される背景、野鍛冶はおおよそ半径5kmのサービスエリアをもちつつ分散していたことなどが明らかにされた。

第11章では、京都府南部の山城地方を対象に、史資料と聞き取り調査にもとづいて野鍛冶と紀州鍛冶の実態が解明された。山城には19世紀半ばまでに紀州鍛冶が展開していたこと、そのなかには「上下鍛冶」と称する季節的な出稼ぎ鍛冶がいたこと、20世紀後半の紀州鍛冶は定住し多様な業種と取引していたことなどが明らかにされた。

奈良県を対象とした第12章では、まず、統計類を駆使して19世紀末以降の野鍛冶の動向が分

析された。つぎに、22軒の野鍛冶を探し出し、1980年の調査時点で10軒の紀州鍛冶が見出された。そして、聞き取り調査をもとに、紀州鍛冶個々のライフストーリーや営業内容の変化などが詳細に把握された。さらに、第3部の総括として、紀州鍛冶の受容地域の諸相についてまとめられた。

第4部の「紀州鍛冶の集団構造と輩出地域の構成」はあとの6章からなる。これまでの分析によって紀州鍛冶の輩出地域と目された現・和歌山県日高郡みなべ町付近を対象に、紀州鍛冶とその輩出地域の実態が多角的に解明された。

- 第13章 文政期以降の南部川流域における紀州鍛冶
- 第14章 安政期の山城とその周辺における紀州鍛冶の分布
- 第15章 紀州鍛冶に関わる受容地域の構成
- 第16章 田辺領における鍛冶仲間と「出張稼」
- 第17章 田辺領における本役鍛冶の稼ぎ場地域
- 第18章 新宮領における野鍛冶と紀州鍛冶

第13章では、紀州鍛冶の核心的な輩出地域が南部川流域であるとしたうえで、みなべ町植田には紀州鍛冶による「恵美須講」が1859(安政6)年には存在し、紀州鍛冶の営業地を調整する役割を保持していたことなどが明らかにされた。そして、みなべ町西本庄に現存する1822年造立の「鍛冶講」と記された石灯籠にも着目した。さらに、本章では、これまでの聞き取り調査で把握していた当地からの輩出者と帰村者の分析をもとに、紀州鍛冶の伊賀への展開や、季節的移動の実態なども解明された。

第14章では、紀伊田辺領の大庄屋の記した『御用留』の1857(安政4)年分をもとに、山城国綴喜郡における稼ぎ場所争論が詳細に検討された。この争論は、河内で営業する紀州鍛冶と、紀州鍛冶をふくむ山城の鍛冶組織の営業地をめぐる集団同士の対立であり、田辺領の鍛冶組織や「京都鍛冶年番」などが関わる複雑なものであった。その際、安政期には田辺領から約1,000人の出稼ぎ紀州鍛冶(株持親方約300人・手間勤と弟子約700人)が、山城などの6カ国に展開していたことを詳らかにしている。

第15章では、輩出地域を南部川流域ほか4つの流域に区分し、紀州鍛冶の実態が史資料にもとづいて流域ごとに分析された。その結果、印南川流域から輩出された紀州鍛冶が、19世紀初頭の時点で摂津・和泉・紀伊北部に展開していたことなどが判明した。そして、南部川流域からの紀州鍛冶は、印南川流域からの紀州鍛冶の営業地より北方に展開したとの推定がなされた。

第16章では、紀州鍛冶の他国での営業の開始時期を検討すべく、紀伊田辺領の大庄屋の業務記録である『万代記』が用いられた。そして、その1719(享保4)年分から「他所」へ稼ぎに行く鍛冶、1753(宝暦3)年分から摂津での稼ぎを願ひ出た鍛冶がいることなどを示した。さらに、野鍛冶の営業地をめぐる規制を検討する過程で、田辺領の南半部においては、定数化された株を有する本役鍛冶が排他的な営業エリアをもっていたことなどを確認した。

第17章は、田辺領における野鍛冶の営業規制と、その規制によって排除された野鍛冶の動向を検討する。経営権をもたない野鍛冶が排他的な営業エリアに多数入り込んだ要因として、そのエリアの不明確さや、営業権をもつ野鍛冶と農民の需要とのミスマッチなどが指摘された。そして、紀州鍛冶の出稼ぎの一因として、排除された野鍛冶のなかに、営業地を他国に見出した者がいたことを指摘した。

第18章では、輩出地域の範囲を把握する手がかりとして、紀伊南東部の新宮領と紀州鍛冶との接点の有無が検討された。18世紀末に新宮鍛冶仲間と対立した鍛冶仲間には属さない野鍛冶の分析から、現・大阪府付近には新宮領民に鍛冶の技術を伝授する者がいたことをつきとめた。そして、鍛冶技術を習得しようとする農民が多数いて、他国での修業が常態化していたのではないかと言及し、新宮領と紀州鍛冶には接点があったと推測した。さらに、第4部の総括として、紀州鍛冶の輩出地域の諸相について述べられた。

終章は、17世紀から19世紀前半までの日本の鍛冶、18・19世紀の大野鍛冶、18・19世紀の紀州鍛冶などに関して、本書において解明されたことを的確にまとめる。555ページにある終章-1の図には18世紀以降における紀州鍛冶の地域的展開が示されており、紀州鍛冶に関する本書の到

達点のひとつとみなせる。そして、こだわりをもって検討されてきた『農具便利論』の刊行目的の解釈に対して、一石を投じた。さらに、紀州鍛冶の集団構造や、20世紀における野鍛冶の変容についても述べ、最後に今後待つべき課題をまとめた。

本書によって、紀州鍛冶にかぎっても、紀州に出自をもつ出稼ぎをふくむ野鍛冶が存在したことをはじめ、紀州鍛冶が1820年代には摂河泉と丹波・山城・近江・大和・紀伊の8カ国に展開していたこと、紀伊田辺領における野鍛冶の営業規制が出稼ぎ鍛冶を輩出した一因とみられること、紀州鍛冶がその総体を上位・輩出地域の流域レベルを中位・村落ごとの講を下位とするような階層的集団構造をもつことなど、実に多くの興味深い事実が導き出されたのである。

以上が本書の概要である。誤解や論点を十分に把握できていない点があれば、評者の力量不足であり、お許しいただきたい。

本書を読み進むにしたがって、出稼ぎ鍛冶が受容地域に定住した要因や背景がいつそう知りたくなる。江戸時代の百姓に共通した生き甲斐は、家の継承と発展に尽くすことであったという<sup>4)</sup>。この見解にしたがえば、江戸時代の出稼ぎ鍛冶の多くも輩出地域に戻って人生を終えたいと考えていたのかもしれない。しかし、近代以降その考えに変化が生じ、Uターンしたくてもできない要因が生まれた。その結果、出稼ぎ鍛冶は営業地に定住するようになったのであろうが、その要因は何であったのか。評者は気楽にいろいろ想像してみるものの、人間の移住と定住はさまざまな要因と背景のもとで生じる。その解明が一筋縄ではいかないことは、本書が十分に示している。

一方、史料にとぼしく、すでに消滅した出稼ぎ鍛冶の研究は、成果主義の下、すなわち確かな成果の見込める研究が優先される時代には、敬遠されがちであろう。しかし、著者はこの困難な課題に研究者人生をかけて立ちむかった。そして、出稼ぎをした紀州鍛冶の諸相が、歴史に正しく刻まれることになったのである。

例えるなら、著者は、出稼ぎ鍛冶という未知のフィールドに対して、摩滅した鍬の修理を繰り返

しつつ、実に粘り強く開墾し続けた。その営為の下に生まれた広大な良田沃野が本書である。一読の価値があることは論を待たない。

しかし、本書はボリュームもさることながら、内容をきちんと理解するためには、史料や図表、豊富な注釈にも入念に目を通す必要がある。学位請求論文として上梓されたこともあって、本書の考察と叙述では、周到かつ慎重な姿勢が徹底して貫かれている。そのため、本書の読了は、高度な内容の学術専門書を3~4冊くらい熟読するような覚悟をもたないといささか困難である。

冒頭で述べたように、出稼ぎ職人をふくむ野鍛冶が農村社会に果たした役割はきわめて大きい。小学校音楽の教科書には、1980年まで文部省唱歌の「村の鍛冶屋」が掲載されていた。昨今の刀剣ブームでは、刀鍛冶が注目を集めた。しかし、野鍛冶もさらに広く世に知られるべき存在であることを、本書は的確に示している。

そこで、拙文を終えるにあたり、著者に対しては、鍛冶屋に関する平易な一般むけの書籍の執筆を熱烈なる期待をもってお願いしたい。この書評を書かせていただくにあたり、評者は鍛冶屋に関する事前学習を試みたものの、教科書的な書物を探し出すことができなかった。技術的側面に偏ることなく、出稼ぎをふくめた鍛冶屋に関する一般書を刊行できるのは、著者をおいてほかにいない。本書によって描き出された鍛冶屋の豊かな世界が、さらに世に広く周知されることを強く願う次第である。

(徳安浩明)

#### 〔注〕

- 1) 朝岡康二「鍛冶と材料鉄」(永原慶二・山口啓二編『講座・日本技術の社会史 第5巻 採鉱と冶金』日本評論社、1983)、287-300頁。
- 2) 佐藤次郎『鍬と農鍛冶』産業技術センター、1979。
- 3) 石塚尊俊『民俗民芸双書70 鍬と鍛冶』岩崎美術社、1972、56-58頁。
- 4) 渡辺尚志『近世百姓の底力・村からみた江戸時代』敬文舎、2013、45-48頁。